

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所主任 渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

今、世の中は様々な領域において、大きな変化の渦の中にあるように感じます。環境破壊による地球規模の温暖化等の異常な自然現象、世界レベルで見た日本の子ども達の学力低下、そして政治・経済・産業の分野においても既存の考え方で解決できない問題が表面化しており、新しい時代のあり方が真剣に検討され始めています。

その現れの一つとして、教育の世界で「サステナビリティ」「ESD」「キー・コンピテンシー」という言葉を耳にする事が多くなりました。「サステナビリティ」とは持続可能な、ずっと保ち続けることができるかという概念を示す言葉です。「ESD」とは持続可能な社会の構築・実現・形成を目指す教育内容をさします。「キー・コンピテンシー」とは、現代から将来に亘る問題解決に必要な考え方を、個人の成功と持続可能な社会を両立させる相互関連性をめざす概念を示す言葉です。即ち、こ

れからの時代は、今まで以上に環境保全を考え、人間の生活がそれらと経済的にも調和しながら社会の発展を生み出すような独創力・実践力に基づく具体的活動が求められる事を意味します。

さて、ここで総合科学研究所が今取り組んでいる事業内容を考えてみました。本だよりで御紹介しています、越原春子および女子教育研究、大学における授業法研究、幼稚園・中学校・高等学校での教育研究、地域貢献事業、プロジェクト研究等は未来を見据えた意義ある事業です。そしてこれらは全て、先に挙げた「持続可能な社会」を目指した内容に直結した活動だと言う事ができるでしょう。「キー・コンピテンシー」のポイントに含まれる、「相互作用的に道具を活用」「社会的に異質な集団で交流」「自律的な活動」をヒントとすると、総合科学研究所のそれぞれの研究は情報という道具を駆使して自立的であると共に学際的であり、多くの研究者・大学外組織の人々との協力の上に成立しています。

このように、時代を先取りしているとも言える本研究所の使命は、今まで以上に重要である事を認識した上で、大きな視野の基で先進的な事業に取り組んでまいります。今後とも皆様のご協力をお願いいたします。

平成21年度 総合科学研究所 「開かれた地域貢献事業」報告

<地域貢献(H21年度)>家政学部 家政経済学科 梅本充子、文学部 児童教育学科 渋谷寿(代)・鈴木方子・宇野民幸・小林田鶴子・亀山有希、短期大学部 保育学科 遠山佳治(代)・平井孔仁子・幸順子・清水一巳、短期大学部 生活学科 生活創造デザイン専攻 宮澤秀治・櫻本雅穂、短期大学部 生活学科 食生活専攻 成田公子、名古屋女子大学同窓会「春光会」小原玲子・衣川美智子・構実千代・今井暁子・国分弘子

平成20年度の「開かれた地域貢献事業」では、平成21年3月26日に「みんなで遊ぼう!~子どもから高齢者まで」と題して、地域の公共施設である名古屋市瑞穂児童館・瑞穂福祉会館の新館開館イベントに協力いたしました。しかし、この交流事業は一過性のイベントであって、私たちが目指した「地域の子育て支援活動」の一環に過ぎませんでした。そこで、平成21年度は、地域の公共施設とさらにどのような関係を持続(継続)または構築していくかを念頭に置きながら、すでに交流を進めている名古屋市瑞穂児童館に加え、名古屋市瑞穂保健所との交流事業も展開いたしました。

(文責:遠山佳治)



「オーナメントクッキーを作るう!」



「パソコンミュージックを楽しもう!」



「チャレンジ! 香りのよいヒノキを使って…」



「新しいことにチャレンジ! 拓本をとってみよう!」

1 名古屋市瑞穂児童館との交流事業

①クリスマスイベント 「クリスマスを皆でたのしもう!」
平成21年12月12日(土)・13日(日)

イルミネーション、「オーナメントクッキーをつくらう!」講座、各種イベント「人形劇・おねえさんと遊ぼう!」「ボールでサンタと対戦!」「ヒノキ材を使ってミニツリーや飾りをつくらう!」「いろいろなシャボンで遊ぼう!」
影絵「サンタコースがやってくる!」

②交流事業の各種講座 平成21年9月~平成22年2月

「パソコンミュージックを楽しもう!」「乳幼児の食育相談」「拓本をとってみよう!」「ボディーターク~からだをつかったコミュニケーション」「おねえさんとあそぼう!」「バレンタインのチョコレート菓子づくり」「子育てグループ教室~子育ての疑問や悩みを話し合いたいひと集まれ!」「手作りおもちゃで遊ぼう!」

2 名古屋市瑞穂保健所との交流事業

①平成21年度認知症・うつ予防教室
「若がり教室キラキラコース」

平成21年9月~平成22年1月(夕路学舎)

「懐かしい思い出で、いきいき♪キラキラ(回想法の実施)」

「音楽や歌に合わせて体を動かしましょう」

「伝統的な遊び! 覚えていませんか?」

「新しいことにチャレンジ! 拓本をとってみよう」

「チャレンジ! 香りのよいヒノキを使って…」

機関研究報告

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～19世紀～20世紀における女子教育の国際比較～

石倉瑞恵・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子(代)・依岡道子

本研究の目的は、本学創立者越原春子の建学の精神、教育理念および国内外の女子教育について、研究メンバーが個々の専門分野から多角的に検証することであり、平成21年度から第三期研究が始まりました。

今年度は「19世紀～20世紀における女子教育の国際比較」をテーマとし、研究メンバーが各専門地域の事情や歴史的背景をふまえた研究発表と質疑応答を行いました。

- ・石倉瑞恵「チェコの文化と大学」
チェコの大学の歴史、現在の教育制度、大学の学科や授業内容に関する考察
- ・遠山佳治「明治・大正・昭和前期における日本の女子教育の実情」
明治初期に公布された学校制度に基づく日本の女子教育の歴史と特徴、本学が開設された頃の時代背景や教育事情の考察

- ・木原貴子・依岡道子「イギリスにおける初期女子高等教育ーイギリスにおける女性の大学教育の始まり」
教育の機会を求めて活動する19世紀イギリスの中産階級の女性と、大学での女子学生受容に関する考察
- ・羽澄直子「アメリカにおける初期女子高等教育ー家政学の始まり」
19世紀アメリカで家政学が女性向けの専門学問領域として発展した過程に関する考察

これらの研究発表を基に各国の教育事情を比較検証し、女子教育の意義と成果について研究を深めることが次年度の課題となります。

(文責:羽澄 直子)

機関研究報告

「大学における効果的な授業法の研究5」

～多様な学習成果の評価方法の開発～

本研究は平成21年度～平成23年度の機関研究で、今年度は本研究の初年にあたり、各研究教員における本研究課題の諸問題についての認識を高め共有するため、各研究教員における授業評価方法を発表しあい、諸問題点を検討しました。さらに、土持ゲーリー法一著「ラーニング・ポートフォリオー学習改善の秘訣」(東信堂、2009年)をテキストとして、読み合わせを行っております。

『ラーニング・ポートフォリオー学習改善の秘訣』は、「ティーチング・ポートフォリオー学習改善の秘訣」の続編にあたり、学習者である学生の視点に立った授業改善について記されたものです。優れた授

石倉瑞恵・下木戸隆司・白井靖敏・遠山佳治(代)・原田妙子・宮原悟・幸順子
業改善の秘訣は、ティーチング・ポートフォリオ(教員)とラーニング・ポートフォリオ(学生)の2つを上手に組み合わせることであると述べられています。つまり、授業改善のためには、教員だけが変わるのではなく、学生にも学ぼうという意欲を持ってもらわないといけない。ラーニング・ポートフォリオとは、学生が学習課程を通して、何をどのように身につけたのかをアセスメントするもので、学生の省察を強く促すものであると記されています。

今後、本学におけるラーニング・ポートフォリオとして具体的にどのような運用が考えられるのか、検討を進めていくつもりです。

(文責:遠山 佳治)

機関研究報告

「幼児の才能開発に関する研究」

～幼児の育ち合いを促す保育実践Ⅱ～

今年度の研究の「幼児の異年齢交流・仲間・自然・実体験をキーワードとしたその育ち合い」は、日常の遊びをさらに発展する中で、どのように交流し、その中での子どもの育ちは何かを、学期毎に計画・実践する中で捉えてきました。

1学期の「みんなで遊ぼう」の交流実践をふまえて、2学期は、「お店やさんごっこ」という形で、3歳児から5歳児までの活動の取り組みを観察・考察しました。4・5歳児の展開するお店では、お客さんとしてきてくれる子どもたちに、買い物の面白さだけではなく製作などの工夫がなされ、その工夫をいかに3歳児に伝えるかを、子どもたちが試行錯誤しながら、自分の役割に熱心に取り組む姿が見られました。また、3歳児は、5歳児との関わりの中で、初めてのことに對しても自ら体験しようとする意欲の育ちも確認でき、交流がもたらす意義が見い出せました。

異年齢の関わりの中では、共に経験する中で育つ心豊かな広がりを大切に受け止めていくことが大切です。その育ちこそ、人としての土台となるべき重要な要素であると考え、実践中です。

(文責:森岡 とき子)

幼児保育研究グループ



▲「ボーリングヤ」での楽しい交流

機関研究報告

「高校生の学力向上に関する研究」

～思考力を育む効果的な授業のあり方～

高等学校学力向上研究グループ

総合科学研究所と連携した高等学校の研究活動も3年目を迎え、今年度は「思考力を育む効果的な授業のあり方」をテーマに掲げました。

「思考力」とは「知識を活用して論理的に考え、問題解決などの実践に生かす力」と考え、11月16日(月)～20日(金)に研究メンバー5教科各1時間ずつ研究授業を行ないました。この日に向けて、日々の授業を見つめ直しつつ研究メンバーの教員同士で指導案の検討を重ねました。

11月から12月にかけて研究会のメンバーが、「筑波大学附属駒場中高第36回教育研究会」・「奈良女子大学附属中等教育学校2009年度公開研究会」・「第59回筑波大学附属高等学校研究会」のいずれかを訪問しました。授業参観や研究大会参加を通して、どのように生徒の思考力を育むことを実践しているか研究しました。

2月20日に今年度の研究の総括として研究発表会を行ない、教育講演会が行われました。

(文責:秋田 武史)



▲研究授業

機関研究報告

「中学生の学力向上に関する研究」

～思考力を高める授業づくり～

中学校学力向上研究グループ

今年度は「思考力を高める授業づくり」をテーマに研究活動を進めてきました。2学期から3学期にかけては、10月に2度の研究授業（音楽・理科）と研究会、11月に研究授業（社会）と研究会、更に2月に研究授業（美術）を実施しました。また2月22日には、この1年の研究活動の総まとめとして第27回研究発表会を開催させていただきました。

当日はまず5限（数学）、6限（国語）と研究授業が行われました。いずれの授業も、来年度からの新しい中高一貫カリキュラムを強く意識した内容で、綿密な授業計画に基づく新たな試みが随所に見られる実践でした。その後の研究発表会では、以下のように2つの研究授業に関する発表及び提案と1年間の活動報告を行いました。

研究授業については、数学の実践に関して「生徒の活動」を柱とした授業の展開をテーマに、どのようにして主体性を育むための授業づくりを進めていくかについての提案が、また国語では「読解アイテム」を活用した読む力の育成をテーマに、論理的思考力の基礎を養うためのスピーチ指導や読解指導についての提案がありました。

活動報告では、全部で8回の研究授業と夏期研究合宿を通じて得られた成果と課題についての発表があり、そのまとめの中で、本校が求める思考力について「自らの知と知を結びつけて、新しい知をことばとして作り出すことのできる力」ととらえる提案がなされました。

(文責:福田 誠)



▲研究授業



▲研究発表会

プロジェクト研究報告

「新任教員の適応及び初任者研修に関する研究」

和井田節子(代)・亀山有希

昨年、教育を巡る状況は年々厳しくなり、1年以内に教職を去る新任者の増加が問題となってきました。この春、本学児童教育学科から48名が小学校教諭として採用されます。やりがい感をもって生き生きと働くことができる教師を養成するために大学ができることを探るのが研究の目的でした。

そこで、平成21年3月に本学を卒業して小学校教諭として勤務しはじめた9名から継続的に聞き、困難感を探りました。

また、11の自治体から初任者研修を活用した新任教員への適応

支援の工夫をうかがいました。

その結果、新卒の新任教員は、5月から6月にかけて、学級経営や生徒指導、学習指導での困難感が最も強くなる傾向がありました。着任当初の学級経営等について大学に在るうちに考える機会を作ること、その後の助けになることが示唆されました。また各自自治体も初任者研修を通してさまざまな適応援助の工夫をしていました。

この研究を本学の教員養成に活かしていきたいと考えています。

(文責:和井田 節子)

プロジェクト研究報告

「情報通信機器を利用した双方向型大学授業の試み」

～教職科目「教育心理学」・リベラルアーツ科目「心のしくみ」における実践的検証～

下木戸隆司(代)・白井靖敏

携帯電話は今日ではほとんどの学生が所持しており、コミュニケーション・ツールや情報収集手段として日々の生活に欠かせない存在になっています。こうした携帯電話をレスポンス・アナライザとして活用すれば、学習者にとって利便性の高い教育機器となることが期待できます。本プロジェクト研究では以上の主旨から、携帯電話の電子メール機能を用いた応答システムの構築を行いました。

学習者の携帯電話から発信された情報はインターネットを介してサーバに集められ、そこで加工・集計が行われた後、再びインターネ

ットによって学習者に結果がフィードバックされる仕組みになっています。このシステムを「教育心理学」「心のしくみ」の授業のなかで導入し、毎回の出席管理の目的と平行して、心理尺度・アンケート・小テストという用途で受講生全員に回答を求め、その結果について個人と全体へのフィードバックを行うという形式で展開しました。

本試みはほとんどの受講生に肯定的に受け止められ、授業内容への関心を高める上で効果があることが確認されました。

(文責:下木戸 隆司)

平成22年度プロジェクト研究

総合科学研究所では、自然科学・人文科学等の専門分野の枠にとらわれず、理論研究または実践活動の振興を目的として、学際的かつ複数の研究者による共同研究を助成しています。選考の結果、次の研究が平成22年度スタートします。

「教員養成課程における実技教科指導内容の検証」～小学校教育現場の卒業生からのフィードバックによる～

小林田鶴子(代)・伊藤充子・佐地多美・渋谷寿・和井田節子・亀山有希

本学は教員養成課程としての歴史が長く、現場に多くの教員を輩出しています。本研究はこのような特長を生かして、卒業生の現職教員について、主に音楽を中心とした実技教科における、大学での授業が現場にどのように活かされているのかを検証するものです。

具体的には、卒業後5年程度までの現職教員に、アンケートと聞き

取り調査を行います。それによって大学で学んだことがどのように現場で活かされているか、あるいはそうではないかを検証します。この結果は今後の授業改革に生かすことができますし、調査の段階で卒業生とのコミュニケーションを深めることもできると考えられます。

(文責:小林 田鶴子)

総合科学研究所主催 平成21年度 大学講演会(2月19日)

「電子ポートフォリオの展開」 講師: 絹川直良氏(文京学院大学経営学部教授)

平成22年2月19日(金)に絹川直良氏(文京学院大学教授)を講師としてお招きし、「電子ポートフォリオの展開」という演題でご講演をいただきました。

文京学院大学では初年次教育の一環として、平成20年4月よりポートフォリオ(学生自身による学習到達目標の設定・管理と学習成果を蓄積・整理したファイル)を紙媒体にて始めました。学生がポートフォリオを作成し、それに対して教員が面接の機会にコメントする中で、学生と教員との距離が縮まったという成果が見られたそうです。しかし、紙では教員間での内容の共有が難しく教員の負担が重いことから、電子化(パソコンで展開)の流れへと繋がりました。キャリア教育にも展開を進め、ポートフォリオに学生指導状況を記録し、教職員が共有できるようになっています。文京学院大学では今後も、電子ポートフォリオを「学生についての指導情報の共有」を通じて「少人数教育の維持・強化」を図り「学士課程教育全体への展開」を目指していくとのことでした。

本学にとって今後、より細かな学生指導を目指す上で、大変参考となる講演でした。



平成21年度大学講演会

第3回 高等学校教育講演会(2月20日)

「思考が深まるときとは～林竹二の『授業巡礼』を手がかりに」

講師: 川本隆史氏(東京大学教育学部教授)

2月20日に今年度の研究の総括として研究発表会と並んで行なわれた第3回教育講演会では東京大学教育学部の川本隆史教授をお招きして「思考が深まるときとは～林竹二の『授業巡礼』を手がかりに」をテーマに講演していただきました。

生き方に関わる衝撃を与え続ける林竹二先生の授業巡礼のDVDを拝見し、映像で林先生が述べていらした通り、覚えたことをテストで測り優劣をつけるだけの教育ではなく、子供がしまいこんでいる自分の可能性を自ら掘り起こすのを助ける教育のあり方が大切であると、あらためて感じることができました。

授業が生徒の人生を変えることもあるという実例や体験者の生の声を拝聴できる機会に恵まれ、日々授業を行なう私たち教員は学校教育の重みを再認識し、身の引き締まる思いになれた貴重な経験となりました。

(文責: 秋田 武史)



第3回高等学校教育講演会

第27回 中学校教育講演会(3月5日)

「一私学の進学校への歩みと現状」 講師: 光岡敏雄氏(滝中学校・高等学校校長)

光岡敏雄校長先生をお招きして、滝中学校・高等学校における進学校に向けたさまざまな取り組みをご紹介します。

先生は民間企業で営業職をご経験の後、昭和51年より滝中学校・高等学校に勤務されていますが、講演ではそうしたご経歴にもふれつつ、滝学園の進学校への歩みについて具体的に紹介くださいました。滝学園においても日々の指導においては決して安穩としていられる現状ではないことを率直にお話くださいました。

また、滝学園が現在抱えている課題の一端を明らかにしていただけたことは、私たちが来年度から新しい中高一貫の取り組みを進めるにあたって、さまざまな点で参考になるヒントとなりました。先生のストレートなお話しぶりから、私たちが日頃抱えている滝学園のイメージとは少し違った生徒像も見え隠れして、たいへん興味深いお話でした。

同じ愛知県の私学として、本校が今後更に学力向上に向けた取り組みを推進する上で、たいへん刺激的で示唆に富んだ貴重なご講演でした。この経験を今後の研究活動に活かしていきたいと強く感じました。

(文責: 福田 誠)

今年度運営委員

委員長 遠山 佳治 TOYAMA Yoshiharu (短期大学部)	荒井 康夫 ARAI Yasuo (文学部)	駒田 格知 KOMADA Noritomo (家政学部)
佐野 満昭 SANO Mitsuaki (家政学部)	羽澄 直子 HAZUMI Naoko (文学部)	

研究所メンバー

所長 柴山 正 SHIBAYAMA Tadashi	顧問 河村 瑞江 KAWAMURA Mizue	主任 渋谷 寿 SHIBUYA Hisashi
講師 越原 もゆる KOSHIHARA Moyuru	職員 浅井 貴子 ASAI Takako	今峰 可南子 IMAMINE Kanako

編集後記

ここに、総合科学研究所だより第10号をお届けします。執筆・編集にご協力いただきました方々に深く感謝申し上げます。本号では、機関研究等の大きな研究成果・中間報告と共に、大変好評でした名古屋市瑞穂児童館・名古屋市瑞穂保健所と連携した新たな地域貢献事業、当研究所主催講演会等の概要を報告しました。時代の要請に伴って本研究所の組織や事業内容は大きく変化していきますが、今後とも総合科学研究所の事業にご参加・ご協力いただきますようお願いいたします。

主任 渋谷 寿